

目的 琉装における上衣と和服の長着を比較した場合、一番特徴あるのは返衿であると考えられる。単衣の返衿はとて高度な縫製技術を要し、それはかざり裁ちでないといけなないと推考する。なぜ返衿なのかを追求することによって染織、形態、着装との関係、またそれらに与えた影響について説明していくことを目的とする。

方法 遺品調査、聞き取り調査、文献調査により行った。

結果 返衿とは広衿を外側に折り返して裏衿を見せることをいう。衿の返衿の場合は裏布を見せるが、これは裏社、裏袖と同一の布で袖口、裾から見える裏の美しさと共通するものであった。また、四つ縫いで、すべて毛抜き合わせになっており、両面仕立てで裏を意識した縫製であることも分った。単衣の場合は両面使いの織物が前提になっていた。それは苧麻と芭蕉が夏の衣料として主流をなしていたことと、衿が一重仕立ての返衿であるため表裏がはっきりしていると不自然であること、また袋縫いによって衿付がなされておりそのためにはかざり裁ちが一番適していることなどによると思われる。調査で単衣の紅型は両面染めであることが分った。

琉装の着装形態である広袖、返衿、打掛はすべて裏を見せることにつながり、その一番もともなっているのが返衿である。返衿は琉装を形づくり、また、単衣における返衿の縫製技術は紅型に両面染めを生みださせる最も大きな要因であったという推論に達した。